

高谷 和生

※くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

1 はじめに ～残された一枚の写真との出会い～

平成25年長崎県大村市の第二十一海軍航空廠調査のおり、筆者の出身高校（母校）の一枚である「高瀬高等女学校出身挺身隊」1枚の写真と出会った。学校史を紐解くと在学生徒の東京第二造兵廠荒尾製造所への勤労学徒動員と併せて、卒業生を中心とした「女子挺身隊」の記録（註1）が確認できた。

女子挺身隊とは、第二次世界大戦中の1943年に創設された、14歳以上25歳以下の女性が市町村長会・町内会・部落会の地域、企業等の職域、学校等の学域により編成された女性勤労働員組織である。戦争の長期化に伴う労働力不足を補う為に軍需工場等に動員された。

大村に動員された本班「谷口節子（現姓：福島）」さんの証言（註2）は、以下の通りであった。

「私は昭和19年2月の高瀬高女第31回卒業生だった。学校より女子挺身隊としてどの工場に行きたいかの希望をとられ、仲間12人と“大村海軍航空廠”に挺身隊として、卒業式の2日後に鉄道で大村に向かった。まるで遠足気分、行きは楽しかった。12名は宿舎では、2部屋に分かれて居住し、毎朝、隊列を組み行進して、陸軍歩兵連隊の建物横をとおり出勤した。私は修理工場近くの“発動機班”に一人で配置された。班では御船中学生がエンジンを分解し、諫早高女生や多良木高女生と一緒に記録をとり、本部に報告に行っていた」

「この写真は、田中英子隊長達が休みの日に大村市内の写真館で撮ったもの。第2班である自分は写っていないし、残りの6人も写真をとらなかった。写真前列右から「内濱ツヤ子・中山 敏・中原敏子・田代 仁が、後列右からは、浦田 靖子・田中英子隊長」である。本人である「谷口（現福島）節子」の他「添島トシ、西村タズエ、片山恵子、荒瀬京子、平野よう子」の計12人の編制であった」

「私は、昭和20年10月25日の空襲で、防空壕に避難しようとしたが一杯で入れず、海岸に向け避難している最中に、爆弾にあい足を負傷した。宿舎に戻り医務室で治療したが、今もその時の傷が残っている。この卒業アルバムは、空襲で唯一残ったものである。空襲後は、諫早公園近くの疎開工場に移動し、初夏までおり、その後は長女だったので家庭の都合で美家に帰省した」との証言内容である。

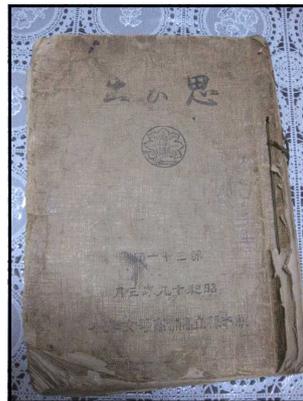


写真1 高瀬高等女学校挺身隊第二十一海軍航空廠派遣の「田中隊（第1班）」集合写真

写真2 昭和十九年高瀬高等女学校卒業アルバム

写真3 福島（旧姓谷口）節子さん

2 三陽航機株式会社八代工場と「流星」風防の生産 (1) 三陽航機株式会社

三陽航機株式会社は1942（昭和17）年2月に創立され、熊本市中央区大江町九品寺に事務所を設置していた。創立時の取締役社長は野田卯三郎、専務取締役は木下高、取締役は古荘信一、監査役は岡田米記等の構成員で、航空機工場は熊本市中央区春竹町八王子の松岡製糸株式会社工場の施設をそのまま本社工場にあてた。通りの向かい側には海軍練習機部品を生産していた古庄航空株式会社、東肥航空株式会社もあり、ここ八王子及び南熊本一体は、健軍町の三菱重工業熊本航空機製作所とあわせ、熊本での航空機生産の拠点であった。1945年8月10日の第2回熊本大空襲では、本地区を含む熊本市街地が空襲対象となる。

熊本工場（熊本市春竹町八王子・敷地12000㎡・従業員600名）には詫麻工場（熊本市春竹町春竹）も併設しており、一

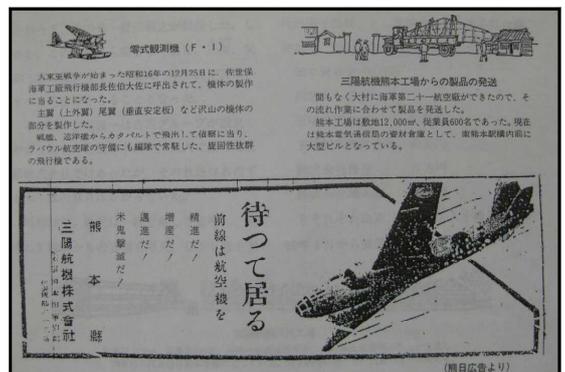


図1 「三陽航機株式会社」広告、零式観測機、熊本工場からの部品発送スケッチ 『熊本に生まれて50年』より

貫して第二十一海軍航空廠の下請け工場として「海軍航空機部品」を生産（註3）していた。1945年3月には「有限会社熊本車両製作所（陸軍輜重車や海軍機翼部・飛行機組立用金具を生産）」と「有限会社熊本興機製作所」を吸収合併して拡充（註4）する。なお、第二十一海軍航空廠機械部作業班の名簿に部品供給工場として「三陽航空機株式会社（原文のママ）」の社名が確認できる。

東亜の中心である熊本における新たな産業として航空機産業の育成に向けて、新興の地域財閥である「古庄財閥」航空機産業の実態（註5）が浮かび上がってくる。敗戦後、三陽株式会社は事業毎に分割して、航空機部門は三陽企業株式会社が事業清算を行い戦災後の復興にあたる。さらに本会社は幾つかの変遷を経て現在は「株式会社 三陽」として三陽ホールディングス株式会社、三陽フードクリエイティブ株式会社等を傘下におき、熊本での経済活動を継続する。1938（昭和13）年3月10日創業から83年の歴史を刻む。

（2）三陽航機株式会社八代工場の概要と学徒隊、挺身隊

八代工場は1943（昭和18年）2月に開設され、所在地は八代市井上町91番地ほかで、戦後は東洋繊維株式会社（昭和21年～31年まで）を経て、跡地には八代ドライビングスクールが所在している。鹿児島本線横の立地で車窓からは、三角屋根が鋸刃状に連続する南北主軸の生産工場が良く見えていたと言う。土地購入資金は、三陽自ら鹿児島ニュー会館の売却資金等の100万円をあて、当時不足していた工場建設資材は、熊本工業学校の旧校舎、大分県犬飼町の肥後製糸株式会社の工場資材を解体して充てた。運搬には、海軍から運搬トラックや燃料の支援も受けた。工場敷地は72000㎡・従業員800人（註6）である。

本工場では「海軍練習機の胴体後半部」と「B7（流星）風防」を生産していた。最大で南北300m、東西250mの方形規格の敷地で周囲は板塀で囲まれていた。本部建物（1階に工場長室・庶務・研修室、2階はその他の部品置き場）、胴体組立建物（長尺の鋸屋根の巨大建物で南北二分割して利用。練習機胴体後部の組立）。風防組立建物（風防枠の穴開け、鋸打ち、アクリル板・有機ガラスの取付組立、塗装の工程、検査係はここに居所）、工作建物（工作機械が沢山入っていた）、胴体部品建物（練習機部品倉庫）、風防部品建物（流星風防の部品倉庫兼板材のカット、曲げ、焼き入れ工程）、医務所兼倉庫、守衛所より成っていた。地元八代の記録では、昭和18年4月「三陽航機株式会社、八代に青年学校開設」、昭和19年3月11日「挺進隊壮行会（三陽航機・興国人絹・浅野セメント・昭和農産加工）」が見られる。

当時の証言は以下の通りである。山本 等さん（二期養成工出身：検査掛工員）証言では「当時工場内では、この生産風防の機種を“B7”と呼んでいた。風防の部材は春竹本社から板状のもので来ており、工場では“板材の再カット”“曲げ”“焼き入れ”“穴開け”“鋸打ち”“組み立て”“塗装”の工程で製品に仕上げていた。出来上がった製品は、熊本市の本社に鉄道で送っていた」。また、岡山敏雄さん証言では「三陽航機で生産していた部品を、馬車にのせて、八代駅に運んでい。八代駅の貨物を載せるプラットフォーム（※筆者註で、通称0番ホームと称していた）で、格子状の木枠に入った風防を見た。どこかに送って組み立てるだと思った」とある。

さらに人吉女子挺身隊の岩崎京子さん証言（註7）も注目される。「昭和20年初め、湯前から人吉女子挺身隊に選ばれ三陽航機へ動員された。工場では飛行機の翼を作っていると聞かされていた。15人前後女性が一組となりハンマーを使って作業した」。また八代高等女学校勤労働員の生徒証言では「昭和20年1月より3月まで三陽航機へ動員。昭和20年1月、八代宮で三陽航機に動員される生徒たちの壮行会があった。ガラスがはめられた風防最前部のジュラルミンに電気ドリルでネジ止めをした。なぜかネジがすぐ曲がってしまい、まっすぐ入れるのが難しかった」とある。



図2・写真3 三陽航機株式会社八代工場スケッチ図
本社従業員の集合写真 『熊本に生まれて50年』



写真4 昭和20年（1945）1月八代宮にて三陽航機へ動員
となった県立八代高等女学校4年生一同の壮行会
宮本雅江氏提供

3 海軍艦上爆撃機「流星」

（1）「流星」とは

艦上爆撃機「流星」（註8）は、太平洋戦争末期に登場した大日本帝国海軍の艦載機である。

昭和16年、海軍より愛知航空機株式会社に対し、艦上攻撃機と艦上爆撃機の両機種統合案による試作機作成が命じられた。機体略称は、十六試艦攻試製「流星」B7A1、試製「流星改」B7A2、試製「流星改一」B7A3。連合国によるコードネームは「GRACE（グレース）」。外見上は中翼単葉、逆ガ

ルタイプ翼、全金属製応力外皮構造、二重スロッチェッド・フラップ及び効力板（スポイラー）装備、翼端部は上方内側折りたたみ式、油圧式内側引っ込み脚である。乗員は操縦員と後部乗員（通信・航行・旋回銃手）の2名（註9）である。

流星の部隊配備は遅かったが、第三航空艦隊の攻撃第五飛行隊（木更津海軍航空基地）に、流星を主力とした部隊が編成され、関東防衛の作戦に参加した。敗戦当日、房総半島沖の空母ヨークタウンに第七御盾隊第四次流星隊2機による特攻を行い、海軍公式記録上「最後の特攻」となった。

量産型の生産は1944年4月から行われたが、搭載する「誉」発動機の不調や熟練工の不足などの悪条件に加えて、工場爆撃と1944年12月7日に発生した東南海地震による工場の被災もあり、生産は遅々として進まなかった。生産拠点の分散のため、大村の第二十一海軍航空廠での転換生産も行われていたが、あまり生産量は上がりず敗戦を迎えた。最終的な生産機数は試作機9機、愛知製82機、二十一航空廠製21機を含めた112機である。戦後、進駐したアメリカ軍によって6機が接收され4機が渡米し、内1機のみがスミソニアン航空博物館ガーバー施設にて分解状態で保管されている。保管機はカラーリングからして大村で生産され追浜に飛んだ大村空廠製「流星」二機の内の1機（註10）であり、今だ復元はなされていない。



写真5 愛知航空機株式会社船方工場もしくは挙母工場で撮影された「流星」機 吉野泰貴氏提供



写真6 海軍攻撃第五飛行隊「流星」千葉県香取基地内、昭和20年3月下旬から4月上旬撮影。第二十一海軍航空廠生産機 吉野泰貴氏提供

（2）第二十一海軍航空廠での流星生産

長崎県大村市の国道34号線から西側、大村湾に面する一帯は古くから放虎原（ほうこぼる）と呼ばれた原野で、1664年に大村藩士千葉ト枕がここを開拓して豊かな農地とした。航空機の大増産を迫られた日本海軍が、手狭な佐世保海軍工廠航空機部にかわる工場用地としてこの土地に目を付け、昭和16年10月1日に第二十一海軍航空廠を開設した。面積約217万平方メートル、建物180棟、人員は最終的に学徒男女8千人を含め約3万人と言われ、当初は零式観測機及びこれらの発動機を、後半期は海軍戦闘機「紫電改」及び「流星」を生産（註11）していた。

昭和19年10月25日、成都から飛来したB-29、78機による爆撃及びその後の艦載機による攻撃で壊滅的な被害を受け、諫早市、金山跡に分散疎開を開始するも敗戦となった。流星の起工式は1944年1月8日に行われ、第二次拡張工事で完成した「第二組立工場（二万四百九十平米）内」で生産されていた。なお、本航空廠での流星の生産数は21機である。以下証言を記す。

操縦パイロット・蓮本末男さん「思い出の第二十一海軍航空廠」『同友』平成7年「二十四号、二十五号までは、試飛行した記憶があるので、二十一空廠で作ったB7は三十機以内と思う」「六人並んだ後に懐かしのB7。日の丸でないのは最後の機、二機をアメリカ駐留後、研究資料として米国に持ち帰る為に、

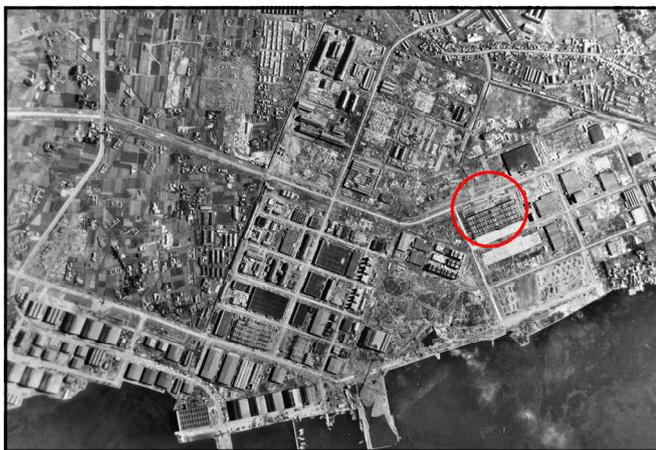


写真7 第二十一海軍航空機廠の空襲前の全景
○印が流星生産の第2組立工場 杉山弘一さん提供

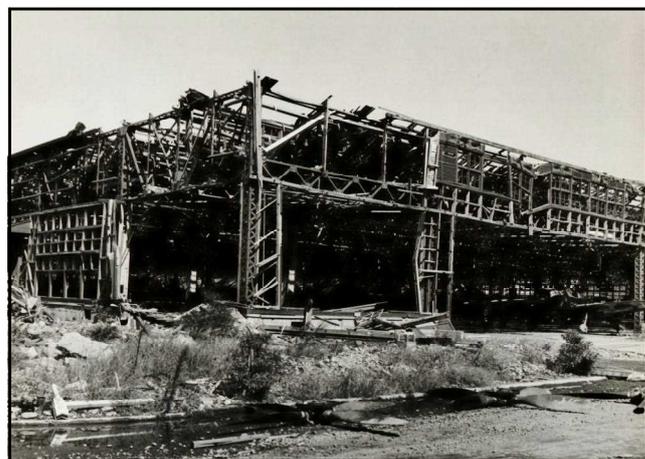


写真8 破壊された第2組立工場と紫電改 1945年10月12日 RG 80 Box 864 写真番号264887 福林徹氏提供



写真9 大村工場内で空襲を受けた「流星」
杉山弘一氏提供



写真10 同工廠内「ハンガー」と標記の第2組立工場内状況と「紫電改」 1945年10月12日 RG
80 Box 864 写真番号264890 福林徹氏提供

横須賀航空隊まで空輸したB7の前の写真である」

飛行機部・伊藤 博さんの証言では「私の配属先は飛行機部機械工場で、……当時、二十一空廠では零式水上観測機（F1M2）の生産をマスプロに近い状態で行いながら……新型攻撃機B7A1を急遽生産軌道に乗せることになった……昭和19年10月25日の大村大空襲は、第二十一海軍航空廠に集中されて全施設は破壊され……飛行機部機械工場は大村郊外と波佐見金山の地下工場で、終戦の日まで昼夜兼行の生産が続けられることとなった」。「流星の主桁加工」『回想 第21海軍航空廠』1978（昭和53）年

飛行機部・田吉 豊さん「流星の起工式は昭和19年1月8日でした。当時の廠長、中村伍郎少将を迎えて飛行機部は……今後の門出を祝いました」「当時、第二次拡張工事も完成し吾々の第二組立工場（二万四百九十平米）は空廠第一の偉容を誇るものであった。本年4月に1号機の試作を終えたB7A1の大量生産に関するすべての準備は完了し、組立治具の上にはすでに機体が続々とならんで……」。掲載「忘れられぬ日」『回想 第21海軍航空廠』1978（昭和53）年

また、第一三一空攻撃第五飛行隊兵器部の井本辰美さんの証言「私と海軍艦上爆撃機流星との出会い」では「攻撃第五飛行隊（通称K5隊）に所属し、4月末木更津基地に移動後、7月10日に仲間10人と大村へ派遣され、機体に吊下する爆弾や兵器の整備にあたった」とされている。

なお、本写真9について、現在本風防の展示がなされている「錦町立人吉海軍航空隊基地資料館」では「…骨組みだけが残る倉庫内に佇む“流星”…」と記載されている。ただし「第二海軍航空廠俯瞰想像図」内の工場配置では、倉庫名称は天井高のある「第3飛行機倉庫」しかない。さらに「紫電改」が写る写真10では、同様構造の工場施設を格納庫とイメージさせる米軍注釈での「ハンガー」として標記している。これらの事から、この一連写真は「1945年10月12日、第2組立工場内での撮影」（註12）と判断したい。

（3）流星風防の概要

2013（平成25）年9月、熊本産業遺産研究会の松本晋一氏より、八代で鉄道愛好家の小澤年満氏（故人）が保管されていた軍用機「流星」風防の資料調査及び公開に向けてのコーディネートの依頼があった。直ちに現在の保管状況での法量計測や材質調査、現況写真の撮影、生産を行った三陽航機株式会社に関わる文献調査、八代工場関係者の証言聞き取りを進め、数度にわたり大村市を訪問し、第二十一海軍航空廠での流星生産に関わる資料調査を行った。

ただ最大の課題は、日本には実機が存在せず、八代資料との照合ができないことであった。ただ運良く世界で1機だけ実機が残されている「スミソニアン航空博物館ガーバー航空機修復施設（PEGF）」で、実機を実見した日本航空協会副部長の長嶋宏行氏にコンタクトを取ることができ、比較検証等でのアドバイスをいただいた。また、岩手の航空機研究家佐藤邦彦氏には、多くの洋書や各種資料の提供を受けた。

調査の結果、遺存風防は5分割パーツで、残り1パーツが欠損していることが判明した。

強化磨きガラス（無機のソーダ石灰ガラス）部、長い年月の間にたわみやゆがみが見られるが有機ガラス（アクリル酸エステル樹脂の透明なプラスチック・匂い硝子・プレキシ硝子）部の残存等も良好であり、前・後席の風防スライドヒンジや閉塞のための木製取っ手等の仕掛けも良好に残されていた。強度を必要とするヒンジ類やスライド部材は鉄製である。

平成26（2014）年2月24日に報道発表を行い、日本で唯一残された「流星風防」公開ができた。以下、調査時の状況を各パーツ毎に概要（註13）を記す。

第①パーツは、操縦席前席の「**第1固定風防**」である。形状は長85.0cm、幅78.0cm、高61.0cmであり、下部にはジュラルミンが附帯し、風防先端部の強化磨き板ガラス1枚、側面4枚、天井部には曲がったアクリル材1枚で形成されている。前方下段の丸穴は、エアーダクト取付穴である。

第②パーツは、操縦席の「**第1可動風防**」である。形状は長83.0cm、幅70.0cm、高44.0cmであり、下部には鉄製金具・ヒンジが装着される。また、内部には開閉用の木製レバーが現存する。アクリル材6枚で構成される。

第③パーツは、操縦席後側から後部搭乗席にいたる無線機等を搭載する中央部で、「**第2固定風防**」で

ある。形状は長120.0cm、幅80.0cm、高52.0cmであり、前側にスライドしてくる操縦席風防を受けるレールが設置される。アクリル材8枚で構成される。

第④パーツ（後部搭乗席前部・「第2可動風防」）は、引きわたし当初より「欠損」している。

第⑤パーツは、後部搭乗席後部の「第3可動風防」である。形状は長45.0cm、幅70.0cm、高50.0cm、下部には長短2種の鉄製ヒンジが装着される。アクリル材3枚で構成される。

第⑥パーツは、後部搭乗席最後部の「第4可動風防」である。本品は機銃操作時は内部に180度回転して収容される構造である。形状は長75.0cm、幅40.0cm、高25.0cmであり、下部にはジュラルミン部が附帯し、内部には13.2mm機銃取り付け金具及び固定ワイヤー金具が確認された。アクリル材2枚で構成される。



写真11・12 戦後も三陽航機関係者宅に残されていた「流星」風防、調査の様子 2013年9月撮影

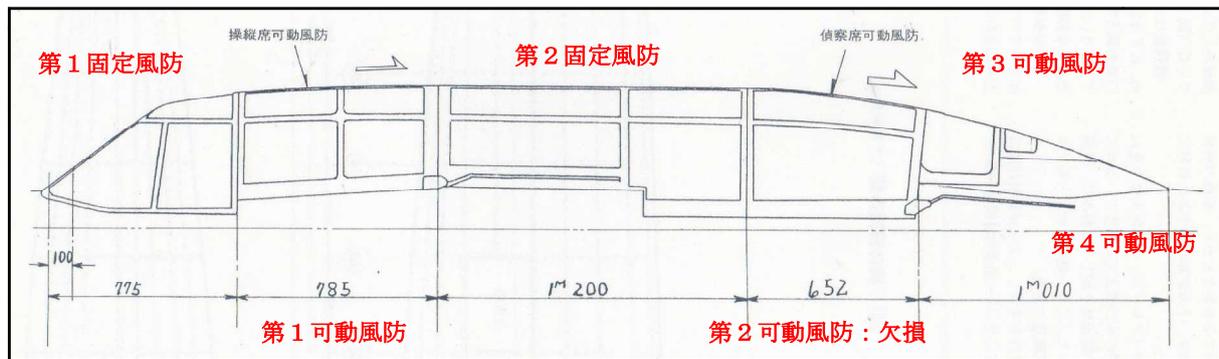


図3 流星風防構造図 『日本軍用機図鑑』より

(4) 流星風防の各機能等

本稿では第1固定風防及び第3・4可動風防についてのみ、世界で唯一実機が現存するスミソニアン国立航空宇宙博物館・別館ガーバー保存施設内の流星（註14）と比較してその技術・機能等を更に補足説明する。

ア 第1固定風防

操縦席前席の「固定第一風防」の風防枠基部・下部は「ジュラルミン一発整形」である。風防先端部の



写真11・12 ガーバー保存施設内で撮影された「流星」機体と「第1固定風防と計器盤」 長島宏行氏提供



写真13 第1固定風防の外側



写真14 第1固定風防の内面

強化磨き板ガラス1枚、側面4枚の平板アクリル材、天井部には曲面アクリル材1枚の各部材をジュラルミンの細い板状部材と内面には窓枠強化用の4箇所T型鉄製金具で固定し風防枠を形成している。全体的に「か細く」きゃしゃな感じではあるが、空気抵抗を減ずる工夫が丁寧になされている。また、正面には機内への空気吸入の換気ダクト挿入口が穿たれている。

イ 第3可動風防と第4可動風防

ここでは得意な装着と可動となる第3可動風防、第4可動風防についてとりまとめる。

機銃射界確保の為の風防作動要領は、先ず手で第3可動風防（機首から見て）左手前の固定用垂直レバーの上部に付くボタンを押してロック解除し、機首側前方部へスライドさせ、カチッと止まるまで移動させる。ヒンジ下部先端は丸くなっており機体側に付く筒型のレールに沿って風防ごと第2可動風防内側に収納される。

第4可動風防は前後取付け軸を中心に180度回転し射撃時の視界確保のため下部に収納される。内面には13mm機銃固定用の鉄製金具が附帯する。またバレルクリアランスの為のへこみがあり、これは「愛知（M6A）晴嵐」と基本構造が一緒で、銃身もろとも回転して収納される。ガーバー施設内の展示機晴嵐の紹介写真等からもこの構造が確認できる。図4の日本機大図鑑内「晴嵐」頁を参照いただきたい。



写真15 第3・4可動風防の全景



写真16 第4可動風防の裏側、機銃固定用金具



図4 「晴嵐」後席全容と旋回機銃



図5 ガーバー施設内の「流星」後部席と第3可動風防、回転式の第4可動風防

ミケシュ氏著書 佐藤邦彦氏所蔵

(5) 「流星」とその戦後 ～もう1枚の写真から～

写真17は、平成6年9月に蓮本末男（元操縦パイロット・海軍少尉）さんの自宅から偶然発見された。写真中央右から3人目が蓮本さんである。蓮本証言では「黒崎・高野・安部・鈴木の諸氏に囲まれた」「日の丸でないのは最後の機、二機をアメリカ軍進駐後、研究資料として米国に持ち帰る為に、横須賀航空隊まで空輸したB7の前の写真」「最後の二機目を再度空輸して任務を終えて」と記されている。このカット及び写真18については、昭和20年10月撮影であるが、どちらの空輸時かは不明である。

なお、人吉海軍航空基地資料館では「・厚木基地に（神奈川県）へ向かうために大村飛行場で撮られた」と記載されている。ただ移送先は『流星戦記』及び吉野泰貴氏紹介文（註15）に記載されている様に「神奈川県追浜基地」であり明らかな誤りである。



写真17 戦後大村基地から横浜追浜基地へ移送される流星。主翼には星印が見える。『楠のある道から』より

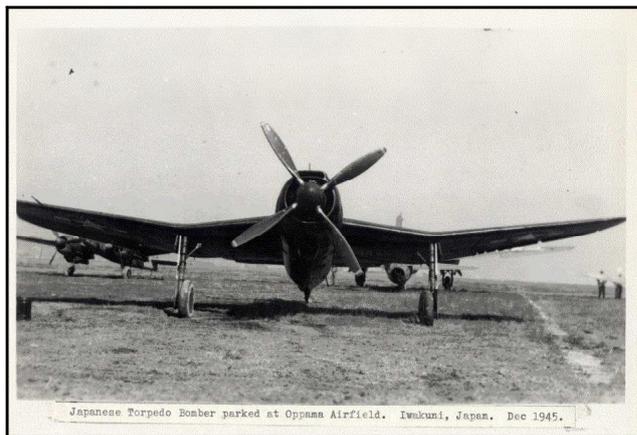


写真18 米軍引渡のために経由地の岩国飛行場を訪れた大村から移送の「流星」 吉野泰貴氏提供

5 まとめ

戦後74年となる平成26（2014）年8月1日～30日までの期間、熊本県玉名市「玉名歴史博物館」エントランスホールで流星風防の公開を行った。全国から航空ファンが詰め寄せ、大きな反響となった。高瀬高女挺身隊の1枚の写真から、導かれる様にして、大村の二十一航空廠で生産された希有な艦上爆撃機「流星」風防の調査・公開ができたことに不思議な縁を感じる。

現在「流星」風防は、「常設展示が可能な施設」という現所有者小澤光二氏の意向に添い、錦町立人吉海軍航空基地資料館で委託展示がなされている。幾つかの雑誌等でも取り上げられ、多くの方々が実物風防を目にして頂くことは喜ばしい。ただ、一方では館の設置目的も含め、この展示で何を伝えたいのかが、筆者には理解できない。先述したように資料検証の不備等で幾つか展示記載に誤りがある。さらに最も伝えていくべき本風防の「熊本の航空産業の位置付け」や「歴史価値」は問うていない。あまりに流星機体説明に偏重しすぎ、軍事・戦史資料館での展示かと疑ってしまうのは筆者一人であろうか。

空襲や戦災、戦争遺跡・戦争遺産の調査研究は「マイノリティへの視点」を持つ事が大切である。「平和を希求」すべく、来館者へ「戦争の歴史を考える展示」となるように強く願っている。



写真19 熊本県玉名市「玉名歴史博物館」で公開された「流星風防と第二十一海軍航空廠資料展」の様子

